

# 病児保育奮闘記

(11)

子どもサポート H&K

大石 仁美

## 絵本の魅力

うちの施設は、テレビは置いていません。病気の時は目も疲れていると思うので、出来ればゆっくり寝かせたい。DVD などを見せるより、膝の上で絵本を読んであげた方がお互い温かさが感じられて、双方とも満足というもの。やはり人は触れ合うのが一番の栄養であり薬だと思います。子どもの遊びは玩具以外では、うたあそび、折り紙、お絵かき等ですが、なかでも一番大切にしているのが絵本の読み聞かせなのです。

子どもサポートを立ち上げるときに賛同してくださった方から絵本の寄贈をいただきました。遠く長野県の園長さんが送って下さった絵本はシンプルな内容で、何度も繰り返し読むことで、子どもの心に自分の世界がどんどん広がっていくのだなあということを実感できるものでした。子どもに余計な言葉は要らないのですね。現場におられる方が選んでくださった絵本は、現場経験のないものにとって本当にありがたいものでした。子ど

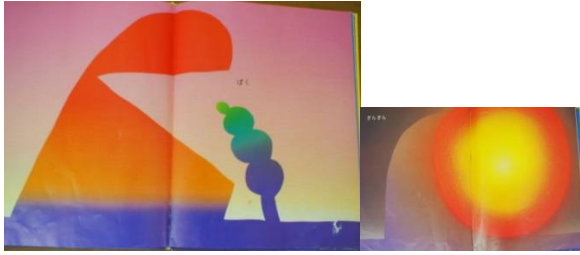
もたちは何度もなんども、「もう一回!」と言って読んで欲しがりました。もうボロボロになって買い換えたものもあります。

これらの絵本を読む中で、私も絵本の選び方を学んでいくことが出来ました。



## 驚きと感動の絵本

人にはそれぞれ心に残る絵本があると思います。私が感動した絵本をいくつか挙げてみますと、「もこもこ」谷川俊太郎作・元永定正 絵



この本に言葉はほとんどありません。「もこ、もこもこ」「によきによき」「ぶちーん」それらの短い言葉とシンプルで鮮やかな絵だけで、天地創造から、宇宙未来まで果てしなく世界が広がっていくのです。この本を見た時の感動と驚きは言葉では表現できません。これが乳児用の絵本なのか！作者は谷川俊太郎。あの有名な詩人。そして絵がなんと恐ろしくも素晴らしい！！詩の世界を形と色彩で表現する絵の持つ力に圧倒され、そしてしばらく絵本の世界のなかを浮遊してしまった私でした。

「スーホの白い馬」 赤羽末吉画



これは有名なモンゴル民話ですが、他の人が描いたものと比べると、ダントツに赤羽末吉画は素晴らしいのです。モンゴルの草原は果てしなく広い。360度草原のなかを風が走り抜けるのです。訪れた者も、まだ訪れたことがない者も、同じように絵の世界に引き込んでくれます。青い空の下を風をきって走る白馬。白馬にまたがるスーホ。愛しい白馬と心通わせるスーホに自分を重ね、思わず涙してしまいます。人と動物がこれほど心を通わせられるなんて！欲のない動物の飼い主を慕うひたむきさに、人はいつも救われてきたのですね。

まるでバックグランドミュージックのように、情景を鮮やかに映し出すこの絵の力によって、深くふかく物語の世界に入り込めることに感動です。

絵本はやはり絵が命です。じっくり吟味して選びたい。そのことを教えてくれたのがこの本です。

「チェロの木」 いせひでこ



しずかな森のなかで、重厚なチェロの音が遠く

から囁くように聞こえてくる、そんな絵本です。さすが画家の伊勢英子さん。ページをめくるとにハッとさせられ、そしてぐいぐいと引き込まれる美しい色の世界。色と色の、色と人の、人と人の会話がからみあって美しい旋律になって流れていくのです。5歳以上の絵や音楽の好きな子には、たまらない絵本です。もちろん大人にも。



### だるまさんシリーズ

この本は2歳までの小さな子たちに大人気。作者のかぐいひろしさんはこの3冊を書き終えてすぐ急逝されたので、残念ながらあとはありません。最初、なぜこんなに人気があるのか不思議でしたが、何度も子どもたちに読んでいるうちに、だんだんわかってきました。とってもシンプル。そして絵がかわいらしく、ドテッ。プシュー。などの擬音が、ことばを覚え始めた子どもの耳に刺激的で心はずむのですね。

子どもと一緒に手遊びしながら楽しめる本として良い本だなあとと思います。

## 子どもの記憶

子どもの記憶は侮れません。幼い時の記憶は、感動した瞬間に一枚の絵となって脳裏に焼き付くようです。

「おばけのはなし」を古本屋で見つけ買って帰

りました。これが思いのほか子どもたちに好評で、なんども「よんで！よんで！」と引っ張りだこになりました。40を過ぎた我娘が、それを見て、「あら、私もこれ読んでもらったことがあるわ。」というのです。母である私はほとんど覚えがありません。

「ほら、唇がびろんとむけた絵があるはず。おんぶおばけの話でしょ。私その唇が印象的で忘れられないのよ」開いてみるとあら、ほんと。確かにおんぶおばけの話でした。

その大きな唇に描かれた曲線が、怖いというより、なんともなまめかしいのです。



この本は、寺村輝夫 文

ヒサクニヒコ 絵

1977年初版ですので、娘が5~6歳の頃だったのでしょう。子どもの記憶の不思議さが少し解明されたようで、興味深いことでした。

私自身を振り返ってみますと、最初の記憶はフランダースの犬でした。ずい分昔、60年ほど昔ですが、カバヤのキャラメルを買うと、本と交換してくれる引換券が入っていて、それを何枚か溜めて自分で自分の本を手にしたのはじめての体験が、このフランダースの犬でした。なんどもなんども読み返しその度に泣きました。私の犬好きの原点はここにあるのかもしれませんが。

時代は変わっても、心に残る本は延々と引き継がれていくのですね。

絵本はたかが絵本ではありません。短い言葉と絵。この二つが共鳴しながら膨らみ、とてつもなく大きい世界を形成していくのです。

大人が読んでも十分楽しめる絵本。その魅力に気づいたのも、子どもとかかわる仕事に携わったおかげです。

## 読み方のコツ

絵本を読むときには、途中で余計な注釈は入れない方がいいようです。大人が口をはさむことで、子どもの心に広がっている世界を中断して、せっかく物語の世界に入っているのを邪魔してしまうように思います。そこに書いてある言葉だけを読めばいいのです。ただ、どのように読むか、それが大切。

知人に自宅で文庫を開いておられる K.I さんという方がおられます。この方の読み聞かせがまた素晴らしい。忙しいときはお手伝いに来て頂くのですが、近くで仕事をしていて、思わず手を止め聞き入ってしまいます。私も時々真似をしてみるのが、なかなか彼女のようにはいきません。

絵本を読みこんで自分のものにしてから声に出す。幾通りもの声色を使い分け、子どもの反応をみながら、読み進めています。時に読み手の感性や、人間性まで問われる。さらに上を行くと、芸術の域に達するのだと思います。

このように力のある人に支えられて病児保育が営まれていることを幸運に思っています。

子ども達の心に残るよう絵本の読み聞かせはこれからも大切にしていきたいものです。